

8月15日の終戦記念日、佐喜眞美術館開催の「骨からの戦世―65年目の沖縄戦―比嘉豊光展」のシンポジウムへ足を運んだ。昨今の普天間基地移設問題をめぐり、県内各地で「軍事基地撤去」「自己決定権の樹立」「琉球独立」の声が高まる状況下にあつてか、会場は超満員の聴衆で埋まった。



会場の壁中央の作品は、地中から表出した頭蓋骨が観客に何か話しかけるよう

おきなわ美術コラム

視線

上原 誠勇

にこちらを見つめる。那覇市真嘉比の区画整理工事現場から出てきた沖縄戦当時の日本兵の遺骨と兵器、水筒、万年筆などの遺品の数々の写真だ。

撮影した写真家の比嘉氏は「私は撮ったのではなく（彼らに）撮らされた」と語った。終戦記念日にふさわしいシンポジウムと展示会だった。

ヤマトから招かれた大学教授や評論家のトークセッション。沈黙し、言葉を発せない脳みそが頭蓋骨の中から取り出され、洗い出される映像シーンの中で、学術専門用語の多用と傍観者の域を越えられない内容のトーク。ヤマト人の沖縄の現場性の認識と距離を縮め

戦後65年の記憶と溝

られない言葉のむなしさ。会場を囲む壁に展示された痛ましい姿の写真との大きな落差は禁じえず、時間とともに、もどかしさと強いストレスを覚えた。

骨をアイコン（記号）として捉えた視点からの冷ややかなトークだった。某パネラーは「骨たちはやっと陽の目を見ることができ、喜んでいようだ」と発言した。フロアから「あなた方は何も分かってない、沖縄の戦後は終わってない」と怒りに満ちた厳しい声が上がった。暴力的に米軍基地を押し付ける日本政府、日米安保の本質に触れようとしぬいヤマトンチュ（ヤマト人）。日米安保が軍事同盟に変質強化される現

在、1960年、70年の安保反対闘争は遠い昔の出来事になってしまったのか。歯並びのきれいな若い兵士と思われる頭蓋骨のまなざしは「もう戦争はたくさんだ、犬死にはしたくない」と呻いているようなのに。戦後65年の記憶と史実の深い溝に沈む問題は、ミイラ化した脳みそのヒダに刻まれているはずだ。ヤマト人こそ、その脳みその記憶を読み解かねばならない。比嘉豊光氏の「撮らされた」作品群によって「戦と人間」「ヤマトと沖縄」をテーマに重いボールがヤマトへ投げられた。日本の各地でこの作品展が開催されることを願わずにいられない。（画廊沖縄代表）